

# 李通玄における『華嚴經』 「入法界品」十住位の善知識たちの理解

伊 藤 真

唐代の居士・李通玄は、『華嚴經』「入法界品」を正宗分として重視し、善財童子が遍歴する善知識たちを菩薩の修行階位に配当して理解したが、①比丘と俗人の区別、②女性善知識の重視、③十波羅蜜との対応といった点を密接に関連させながら独自の論を展開した。本稿では管見による限りこれまでに論及されてこなかった右の点に着目し、李通玄による十住位の善知識たちの理解について考えてみたい。<sup>(1)</sup>

## 一 比丘と俗人

善財童子が遍歴する五十数人の善知識の内、文殊菩薩に続いて登場する最初の十人が十住の善知識とされる。

- ① 德雲比丘（初発心住）② 海雲比丘（治地住）③ 善住比丘（修行住）
- ④ 彌伽（生貴住）⑤ 解脱長者（方便住）⑥ 海幢比丘（正心住）⑦ 休捨優婆夷（不退住）⑧ 毘目瞿沙仙人（童真住）⑨ 勝熱婆羅門（法王子住）⑩ 慈行童女（灌頂住）

李通玄はこれらの善知識について

前の德雲比丘・海雲比丘・善住比丘・海幢比丘は總て是れ成佛出世間解脱位を明かす。彌伽・解脱長者・休捨優婆夷・毘目仙人・勝熱婆羅門・王女慈行は、總て果中に圓かに菩薩道を會す。（大正三六 九六六上）

と、比丘と俗人を峻別し、また初めの五人の善知識について前の三善友は出世の智慧を明かす。三比丘を明かし之を表す。此の彌伽及び解脱長者の二人は處世間の解脱を明かすが故に、還た俗士を以て之を表す。（同九五九下）

と言う。李通玄は明確に比丘は「出世」を、俗人は「處世間」を表すものとして、善知識たちを理解していることがわかる。

比丘にはもうひとり、第六正心住・海幢比丘がいる。李通玄によればこの第六住は「出世間及び處世間の智慧神通を得る」とされるが、この階位の善知識が比丘であるのは「未だ俗に入り纏に同じる圓滿なる大慈悲心を行ずることを得ざるが故に」（大正三六 九六〇中）とする。李通玄は、第六住までの階位を善知識の比丘／俗人の別に即してとらえ、主とし

て智慧が出世間（初住／第三住）↓ 處世間（第四・五住）↓

出世間・處世間（第六住）という具合に体得されていく過程と見ているが、第六住では慈悲（＝悲）という点でも比丘Ⅱ出世間とし、俗人の善知識によつて表される處世間の慈悲こそ円満なる慈悲だと示唆している。

比丘／俗人、出世／世間という視点は第七住／第十住はもちろん、十行と十廻向、さらには出家者がひとりもない十地の善知識の解釈にまで一貫している。そこには、李通玄の世間・世俗へのこだわりを読み取ることができる。「俗に入り纏に同じ」て歩む俗人の善知識たちにこそ、李通玄はみずからが追究する菩薩の姿を見ていたと言えるだろう。

ただ注意すべきは、彌伽と解脱長者の両俗人は「眞従り俗に入り、以て眞俗を和會する無二の門を明かす」（大正三六九五九下）とされる点である。それは「先に出三界の解脱を修して方めて世法を修し、生死に住することを明かすが故に。：俗智は是れ根本智の中に起るを以ての故に」（同九五八下）ということである。この根本智とは一切皆無の理を顕し出すもの<sup>(2)</sup>で、「根本智を以て萬行之體と爲す」（同二〇二二下）。つまり根本智あつてこそ生死の世俗における菩薩の行の「用」（＝はたらき）があり得る。行の「用」とは慈悲であろう。<sup>(3)</sup>「入法界品」で海幢比丘の次に登場する女性善知識・休捨優婆夷では、「女性」と「慈悲」が焦点となる。

## 二 女性善知識

最初の女性善知識である第七不退住の休捨優婆夷について、李通玄は次のように述べる。

優婆夷とは慈悲行を表す也。：前位は是れ出世無染の大悲の法門なり。即ち比丘を以て之を表す。此の位は俗に入り染に處り而も汚ならず。眞に處り俗に同じる之慈悲なり。（大正三六 九六一下／九六二上）

第六住までの主たる関心は「智」の展開にあつたのに対し、休捨優婆夷は「悲と智とを會することを表す」（同九六二中）とされ、第六住までに体得された智に基づいて俗世に同じて慈悲を行じる「處眞同俗之慈悲」を表すとされている。

また、第十灌頂住の慈行童女という王女の善知識は

智自在なるを王と爲し、大悲行遍きを女と爲すを表す。：即ち師子幢王女是れ童女也。此の位は任運に利生し、染習無きを表す也。（大正三六 九六四下）

とし、王（＝男性）が智を表すのに対して、女性が大悲行を表すとされ、特に童女は任運にして染習無き利他を表すとされている。この点は十一地（＝等覺）の最後の善知識である徳生童子と有徳童女についても指摘されている。<sup>(4)</sup>なお、女性が慈悲を表す善知識とされる理由は「女は是れ慈悲の能く子孫を長養し、疲勞すること無きを表すを以ての故に」（大正

李通玄における『華嚴經』「入法界品」十住位の善知識たちの理解（伊 藤）

一五八

三六 九八六上）などとされている。

女性善知識が慈悲を表すとする点でも李通玄は一貫している。女性善知識は十行、十廻向、十一地でも登場し、十地は初地から第九地までが女神で第十地が瞿波（釈尊の妻）と、すべて女性である。李通玄は女性善知識が登場するつど、慈悲を表すと指摘している。<sup>(5)</sup> 俗人Ⅱ世間へのこだわりと共に、李通玄の慈悲へのこだわりがうかがえる。そこからは、「俗に入り纏に同じ」ながら「處眞同俗之慈悲」で「任運に利生し染習無」という菩薩の姿が浮かび上がる。ただし、「悲と智とを會す」ことが必要だった。菩薩の修行階位は「智」と「悲」を深め、成就していく過程だとも言える。最後にこの点を十波羅蜜との関係から見てみたい。

### 三 十波羅蜜との対応

李通玄の善知識の理解のもうひとつの大きな特徴が、各階位と善知識に十波羅蜜のひとつを割り当て「〇〇波羅蜜を主とし、余の九を伴とする」とする点である。十地や十行の階位または善知識に十波羅蜜を対応させる解釈は智儼、法蔵らにも先例があるが、十住や十廻向を含め、すべての善知識に割り当てる点、李通玄の解釈は特異である。

ここでは「般若波羅蜜を主とする」とされる第六正心住・海幢比丘に再び注目したい。

第六波羅蜜は偏へに世間出世間の寂用自在ならざる障を治す：常住世間の慈悲は猶ほ劣るが故に、海幢比丘を以て之を表す。慈悲有りとも、但だ無染行清淨之慈を得るのみ。衆生に同じて行じ、衆生の事に等きを得ず。（大正三六 九六二下）

と、般若波羅蜜を修しても「常住世間の慈悲はなお劣る」と言う。同様のことを李通玄は随所で論じている。第七不退住の休捨優婆夷について（第六住までの）「六波羅蜜の行は出世心を修す。：もしや後の第七位に即ち生死に入ること無くば大慈大悲之行は絶ゆる也」（同一〇二九上）とし、第七・方便波羅蜜を主とする第七地の善知識・開敷一切樹華夜神の箇所では「若し此の地に生死に返還し同行攝生すること無くば、但だ六波羅蜜の出生死の道を得るのみならん。其の後位を捨て、佛の十力大悲は總て無からん」（同一〇四三下）と言う。

これは「第六正心住Ⅱ比丘Ⅱ世間・出世間の智慧」から「第七不退住Ⅱ優婆夷Ⅱ處眞同俗之慈」へ、つまり智から悲へ、出世間から俗世へとの解釈と合致する。そして第八住・毘目瞿沙仙人は「大願波羅蜜を興作するを以て智悲をして任用自在」とし、「力用自在なる」第九住・勝熱婆羅門と続き（同九六四上）、第十住・慈行童女に至る。十波羅蜜との関係では

智波羅蜜を主と爲す。餘の九は伴と爲す。此の位は智を以て修行の前後差別及び智悲の均平ならざる障を治す。智悲圓滿前後自在無二の門に入る。（大正三六 九六六上）

とされている。十波羅蜜と階位の関係からも李通玄は、第六住まで（六波羅蜜）は出世の智慧の体得が中心となり、第七住（方便波羅蜜）で衆生に同じる慈悲を得て、第八、九（願・力波羅蜜）で智慧を成熟させて第十住（智波羅蜜）の智慧円満に至る歩みを説いている。

#### 四 まとめ

李通玄は「入法界品」の十住位の善知識たちを比丘と俗人、女性善知識、十波羅蜜との対応という多角的な視点からとらえた。そこから見えてくるのは、智（根本智）を根幹（「体」として、眞・出世と纏・世間とを往還しながら、智からはたらき出る慈悲（「用」）を深めていく菩薩の歩みである。修行階位のこうした把握の仕方は十住だけでなく十行、十廻向、十地、そして十一地の善知識の理解にも一貫している。そこには居士の華嚴行者・李通玄にふさわしく、俗世の衆生へのまなざしがある。ただし十行以降では、出家／俗人／女性などの善知識の登場順序は十住とは異なり、李通玄の善知識の解釈も十住ほどの整合性は保ち得ていない。その点、十住の善知識の理解に、李通玄における菩薩の修行階位論の典型的なモデルを見ることができると言えよう。

菩薩は生死の世間における慈悲の行を通じてその智を顕し出していく。菩薩道をいかに行じるべきかと善財童子が問い

続けることについて、李通玄は言っている――。

若し行外に別して菩提を修すれば、聲聞縁覺及び空觀の菩薩の菩提たらん。一乘文殊普賢の理智萬行悲願自在なる菩提に非ず。若し別して菩提を求むれば即ち體用各別にして二見恒に存らん。是の故に但だ菩薩道を求めるのみ。別して菩提無き也。（大正三六 九五三上―中）

- 1 李通玄については湯次了榮氏、高峯了州氏、木村清孝氏、吉津宜英氏、小島岱山氏、稲岡智賢氏等、種々の研究がある。
- 2 李通玄は「一切皆無名爲法身：恒照十方。無有本末方所可依。名曰根本智。」とする。（大正三六 一〇一五上）
- 3 因果体用、智慧については小島岱山氏「李通玄における三聖円融思想の解明」（華嚴学研究 創刊号「一九八七」）がある。
- 4 大正三六 一〇四八中。なお、法蔵も同様の指摘をしている。（『探玄記』大正三五 四六三下、四六八上）
- 5 大正三六 九六八下／九七四中／九七九上／九八〇上／中／九八五上／一〇〇〇下、／一〇〇〇三中、／一〇〇〇四上、／一〇〇〇四中。李通玄の女性観についてはいくつか留意すべき点があるが、本稿では触れない。なお、法蔵にも女性善知識と慈悲を結びつける場合が複数見られる。ただし李通玄ほどの一貫性や強調は見られない。法蔵の女性善知識観については一色順心氏の論考「華嚴の修行道と女性善知識」（佛教學セミナー第六〇号「一九九四」）がある。

〈キーワード〉 華嚴經、十住、善知識、智と悲、李通玄

（佛教大学大学院）